



▲名鉄尾張瀬戸駅(旧駅舎) 平成11年(1999)



▲愛・パーク(瀬戸万博記念公園)



▲蔵所町周辺(中央が旧瀬戸市役所) 昭和4年(1929)

昭和初期の世界恐慌から第二次世界大戦にかけては、陶磁器産業にとっても厳しい時代となりますが、戦後はいち早く復興し、水野村、幡山村、品野町と合併し、昭和34年(1959)に現在の瀬戸市になりました。

平成17年(2005)には、自然の叡智をテーマに国際博覧会「愛・地球博」が開催されました。また、平成29年(2017)には日本六古窯の一つとして日本遺産に認定され、現在も「せとものまち」としてのブランドを保ちながら、新たなものづくりのまちへと発展を続けています。

**陶都から創造都市へ**  
From Pottery Capital to Creative City

瀬戸村は明治25年(1892)に瀬戸町となり、瀬戸川沿いに官公庁や商店が軒を連ね、「せともの」の町として賑わっていました。明治38年(1905)には「瀬戸自動車線」(現在の「名鉄瀬戸線」)が開業し、瀬戸の陶磁器は国内はもとより海外へと運ばれていきました。大正14年(1925)に赤津村・今村・美濃之池村と合併、昭和4年(1929)に市制施行され「瀬戸市」が誕生します。



▲水野代官所碑



▲菱野のおでく(市指定有形民俗)



▲源敬公廟(国指定建造物)



▲雲興寺鐘楼(国登録建造物)

**尾張徳川家と瀬戸**  
Owari Tokugawa Clan and Sato

戦国時代の瀬戸は、品野の品野城・桑下城を舞台に、尾張の織田氏と三河の松平・今川氏の間で攻防が繰り返られました。江戸時代になると、尾張藩領となり、赤津や品野の窯屋が藩の御用を務めるようになります。また、初代藩主徳川義直は、水野の地を鹿狩りで何度も訪れており、自らの墓所を定光寺に定められました。狩場案内役であった水野氏は御林方奉行に任ぜられ、尾張藩の林業を統括し、後には、この地に設置された水野代官も兼任するようになります。

21 平成 世紀      昭和      大正 20 世紀      明治 19 世紀      18 世紀      江戸 17 世紀      安土桃山      16 世紀 戦国 century

**多様化する技術・表現**

Diversifying Techniques and Expressions

15世紀末期になると、一度により多くの製品を焼くことができる「大窯」が登場します。16世紀後期には瀬戸の陶工が美濃へと移り、茶の湯の流行とともに「黄瀬戸」「瀬戸黒」「志野」といった新しい技術・デザインのやきものを作り出し、さらに17世紀初期の「連房式登窯」の導入と相まって「織部」が生産されます。その後、尾張藩は慶長15年(1610)に加藤利右衛門をはじめとする陶工を美濃から赤津村や下品野村へ召還し、瀬戸窯業を再興します。以降、尾張藩の庇護のもと、日用品を中心にやきものづくりが発展していきます。また、同時に名工たちによる一品物の制作も盛んに行われるようになります。

そして、19世紀前期には本格的に磁器の生産も開始され、多種多様なやきものが生み出されます。



▲せと窯風景 小田切春江 19世紀中期 幅49.0cm



▲折縁鉄絵鉢 伝 穴田窯出土 寛永12年(1635) 口径28.0cm



▲染付山水図大花瓶 伝 加藤民吉・伊豆原麻谷画(重要有形民俗文化財) 19世紀前期 高さ46.8cm



▲瑠璃釉瓢形蓋壺 三代川本治兵衛(重要有形民俗文化財) 19世紀前期 高さ19.6cm



▲建水 月山窯出土 16世紀後半 胴径15.2cm

**躍進する陶都**

Rapid Development of Pottery Capital

19世紀後半には、万国博覧会へ出品したことにより、欧米から高い評価を受け、それをきっかけとして瀬戸で作られたやきものの輸出が盛んになります。さらに20世紀に入ると、大量生産の体制が確立します。その一方で、職人や陶工から作家への意識改革も起き、陶芸分野の成立へとつながっていきます。大正3年(1914)には瀬戸における最初の作家集団である「瀬戸図案研究会」が設立され、その後も「瀬戸陶芸協会」をはじめといたいくつかの団体が発足し、国内でも最先端の陶芸活動が行われることとなります。

また、昭和時代にはノベルティや飲食器、タイル、衛生陶器、碍子、理化学用品などの生産が大幅に伸び、輸出を中心とした瀬戸のやきものづくりは最盛期を迎えます。その後、変動相場制の導入やオイルショックなどにより、輸出向け製品は徐々に低迷していきますが、その一方で、ファインセラミックスなど最先端技術を駆使した分野への進出など、陶都瀬戸の歴史は未来に向けてつながっていきます。



▲パーティの前 丸山陶器株式会社 昭和35年(1960) 高さ39.7cm(男)



▲牡丹文碧瓷鉢 加藤華仙 昭和21年(1946) 口径48.5cm



▲花文花瓶 長江明治 昭和3~10年(1928~1935) 胴径23.4cm

上絵金彩菊垣雀図大花瓶▶ 初代川本栞吉 19世紀後期 高さ75.2cm

